

近世
怪談
霜夜星
卷之四

~ 13
35.69
4



門 へ 13
號 3500
卷 4

夜星四卷



第六回

編ご第の狂人
古屋の木

東都

種彦著

よめとてきたりしもの別人ふあふ求次郎が撃鞋作助主人のうら
かたれをさぐりて夜更けくもり須崎をいで花巻へといざぐり。土家の
下ふ人殺ことゆひと躁動あり。何處やらんと足るやふきみまねが
洗鏡肩尖とがまつく柳の樹ふましくとたけとる足と割掃枝
のかじりあり。あつとまふとまふものい何地の人あんと幸ひ雲これ
月の夜とあつとまふとまふのい何地の人あんと幸ひ雲これ
主人求次郎鮮血ふちまれば伏せりければ作助怪然とらちかどりて天を

宵夜星集巻之四

早稲田 大學 図書館
昭和 34.6.3 受
藏 書



さくすけら
いんぐあ
らんごゆ
あゆりけんを
うちくちのく

あつとちかきしを
あつとちかきしを
あつとちかきしを
あつとちかきしを



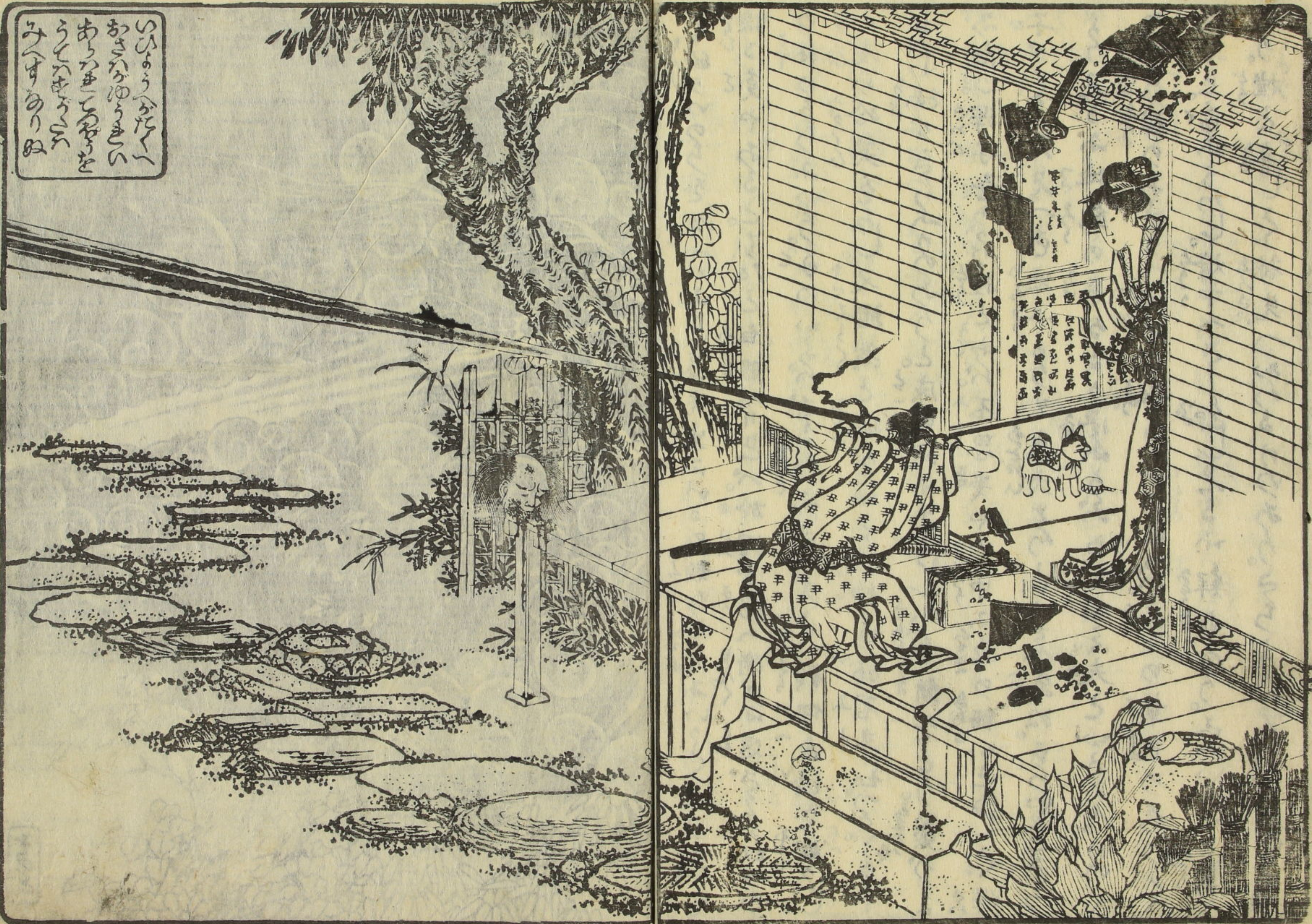
香花夜草卷之四

五

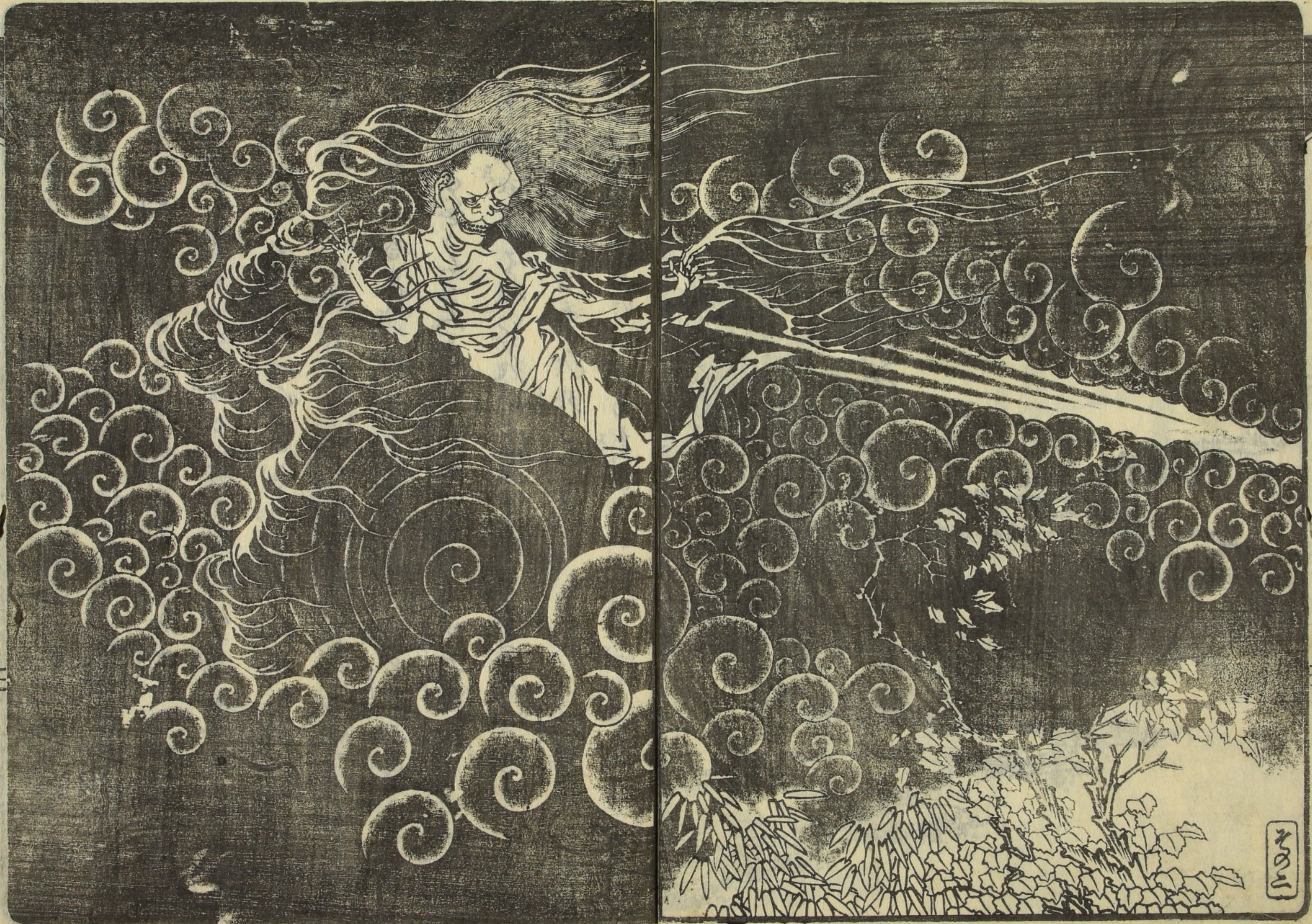


香花夜草卷之四

五



いひようかたへ
あさかゆらまの
あつたせこあぢを
うてあぢを
みへすありぬ



往年仲人志なき散次が鮮首服ハ半ひらひく死もやらば水をのむ
 魚のむく口をふりし居ら。伊去清ハ惣身の毛一度ハ森林
 堅あまの者あまの氣もさう失ふべしを漸々おをよづめ
 散次が首をとらへく。小午銃の驚尾ハらり。泉水へあづめぬ於花
 へのまの筒音ハかどらね。おやをさう出く故棧を向べ白地ハ詰
 らばかまどヤせん。と柄まらひし小鳥の月不の色しをうらとあん
 とあせしもうと答れば於花うらうら。一時の戯ハ愛子の目や
 さまさんと。をさうさうく卧戸ハいるか。悦五郎阿と叫ぶ夫婦
 周章く寝衣をさぬ。いんかもさうや息もさえぐさく。さう
 と乱言をつひ。ほどもあまの死うせまれば。か花ハ只伏轉びく正体
 あり。伊去清もさうさう始タの哀もかひひらぐら。子さう又澤子

が亡霊のつごあめり。悦五郎が死負うらえる。小往年蛇の吐さりし
 花ガ形見の簪みく。口の中うり咽骨をつらぬら。あま小遠の死
 みく死霊の所業うると拳を握く憤る。小又側小陽窓のむく澤子
 が冤鬼ホうつごい。さうさうあまのあらし。悦五郎が死負うら
 ずら。莞尔とあせば。伊去清怒氣をさのびむ。佩刀をぬら。さう
 かも小只霞をさう。煙を突がどし。花子が目み。彼死霊あをさう。え
 見えざれば故もあ。伊去清刀をぬら。さうさうあ。愛。十一人失
 ひ。さうし。狂氣あせし。おのひ。良人おをさ。あづめ。悦五郎
 死さうとも。か村ハ不便とおお。ぬあやと。ひさる。押とらん。海。あ
 ちうく柄ろとさう。伊去清ハ己が刀不く。あ。と耳のね。疵をさけ
 たり。花ハさう。び。あ。い。ん。せん。く。と。泣。か。が。不。残。瘡。あ。れ。ば。あ。げ。さ。

あがりくともあれと布あく捲夜もありたまれりしは悦五郎を野辺送
 した夕一庁の煙とあはしめてぬかくとも伊去清花子の鬱とと
 更ふあしち懐の碎を棄色林の花を窺ふらうせしめひあれど
 村兒がたつらふあるをんく。う色をや住吉の岬あふて萱草と
 ある。二月三月ほどしかり。彼伊去清が創瘡をらうられ。日あぶびて
 全く癒れども何とやん痒をおへ漸々小腫あがり遂小腫物と成
 医師をまねぬくをせまひと何と名つくべしとせしめへせと答ふ
 されらうも膏やをほどこし薬を初とどの験且く多く。今之居
 まらぬふまらむ怪べし。ま一節の珍食いでとて毎夜四更のあり
 ひいとありふある。何方とまらぬ。荒敷多ありあり。伊去清は腫ら
 らうづる膿汁をまらふふの心持らうとつふとらうもなし。花子の

と奇怪なる夏ふのし松方子ちんく荒とあひありづく。まらぬ
 痛堪さく。かくあはし夜毎ふし。遂小伊去清が身軀爛穢ととく
 いのらも絶べうどえへなる。悲歡の中ふも花の一討をりふけ長櫛の
 うらふ伊去清を伏せあり。息出の穴をらうあり側小やめり居
 れ。まらしと荒も来らざらしむむらうとび。五更のありひいと
 あり頃。あやう小音もあざらしむえ。長櫛のふたをひらけらる
 あともまらりまらじやといひつ伊去清をえふ小豆討んや裡ふ
 荒元端く白黒斑あるその數あつて。まらんせん。まらぬのけ
 べ。かの荒ひとらふあらまるとええし。が忽陽冬のとどぬ女の形と
 化。外の方へららる。か花の襟のともり水を洒らうとらう。まらぬ
 倒とらぬ。か村此音あやかたらん側小伏居る。が鬼満をかう。戸を

らうしとつ。岡絶僻地周章死をるそを。か村微笑とむげふおえ
 かり。いふ伊去清水不濁とて死と。いげと苦しからんといひをり。
 恰も橋をこを渡ぐ。二人一度不控と倒せ既不息とて死うせ
 たり。ふのとれ一團の鬼火陰ととて面の方へ出。いげととて
 人声とて今望も足さ。又明日の夜とて来らめとわやくとつらふと。
 花悲とて恐とて半へ死せる人のとて。いとむら声立と泣う母ふ
 可むとて心とて成るがふれも定むる因縁みや。病ありとらり
 一氣つた。近鄰の人く不懺悔のとて。有枝有葉をのりたり。
 伊去清水が亡骸とりかこめんとあひふ。前夜のらけ紐はる海首ふま
 とひくそふれぞ。村兒の俄不死とれば身もあつとむら。結ふ
 からぬ顛ハセをるるふとて胸つと。花子ハ又も狂氣のとて

涙の間ふらりとしと。うやまが身の上不恨る罪もあふふあれ。の子ふ
 何の外ありや。三途川ふやうひと。母よくととらねんふ。あるは路みや
 ありむんと自害せんとしりやを。近鄰の人さまぐふつと和免
 伊去清水村兒が柩をうらぶ。寺院へかり。彼伊去清水が遺言なれ
 ば。かかぬ命もるがうとて尼ふあり。菩提をとげひとてか花ふ
 せられれば花子も入との言葉をうけむと。又明日の夜とて来らめとつ
 声の耳の底不流りとて。恐しく。其日のうらふ家賊とて。こつと
 かさり。墨の衣ふおの涙をまがり。三界無庵樹下石上のたかめく
 と行方定む先ひとぬ。うらふとて。されば龍章ふも
 邪淫ハ五戒のつらびや。つとむべの要あり。まらり。ふり。禪子が
 靈鬼此地ふとらり。陰雨のとて。いづれ鬼火飄蕩とし。爰ハ岡燃

